

ミャオ族の民族衣装の現代的変容

——中国貴州省施洞鎮ミャオ族の事例から——

肖 凌翬

はじめに

ミャオ族（苗族）は、中国湖南省、貴州省、四川省、雲南省、広西チワン族自治州、及びタイ、ベトナム、ラオスなどに分散して居住している民族である。過去には豊かな移動の歴史を有する。国際的にはモン（英語で Hmong と表記）と呼ばれ、モンは、ミャオ族の下位集団とも考えられている [宮脇 2017]。ミャオ族は、中国国内で公的に識別された少数民族の一つで、2010年の第六回中国国勢調査によると、中国国内に定住しているミャオ族人口数は、9,426,007人で、少数民族の中で四番目に多い。その内、貴州省に居住しているミャオ族人口は、3,968,400人であり、全国の約半数を占める。1950年代、中国科学院少数民族言語調査第二工作隊は、ミャオ族の居住区をミャオ語のイントネーションの違いから、湘西方言区（湘とは湖南省の略称）、黔東方言区（黔とは貴州省の略称）、川黔滇方言区（川と滇は四川省と雲南省の略称）の三つの方言地域に分けた。近年、少数民族地域の観光化が中国各地で大規模に実行され、経済発展の遅れた地域の開発手段として、少数民族の生活文化が注目を浴びている。鮮やかで現代の洋服と差異化される民族衣装が特に目を引く。しかし民族衣装自体も、近代化・漢化・観光化などの影響から、いろいろな面で変化を遂げてきた。本稿の主目的は、ミャオ族のサブグループを対象として行った調査をもとに、ミャオ族の民族衣装の変化及び観光化が進む中での資源化の現状とその特徴を考察することにある。

筆者がフィールドワークを行ったのは、黔東方言区に位置する貴州省黔東南ミャオ族プイ族自治州、台江県の施洞鎮及びその周辺地域である。台江県は貴州省黔東南自治州に属し、貴州省の東部、長江の支流清水江中流域に位

置し、総面積は1,115ヘクタール、人口約16万人である。行政区画は、二つの「街道弁事処」——台拱街道、萃文街道、四つの鎮——施洞鎮、南宮鎮、革一鎮、方召鎮、及び三つの郷——排羊郷、台盤郷、老屯郷から成る。ミャオ族は全県人口の93%を占めており、台江県は、全中国の県行政区画において、ミャオ族の人口比率が最も高い県である。言語は漢語以外ミャオ語黔東方言も通用している。

清の時代に「台拱庁」が設立され、1914年台拱県となった。1941年に隣の丹江県と合併して台江県となる。農業セクターも衰退しつつある現在、発展後進地域として、農業を放棄し、出稼ぎ労働者の大量輸出地域となっている。従って、人口変動の激しい地域となり、普段は若年層人口が激減し、長期連休やミャオ族自身の祭事に、大挙して戻るような状況が続いている。都会の省都貴陽から184 km、車で約3時間程度、黔东南ミャオ族トン族自治州の中心都市凱里まで約30 km、車で約30分程度の位置にある。

ミャオという呼称は他称起源である。『苗族簡史』によると、ミャオ語の方言地域別では、黔東方言区では自称ムウ、川黔滇方言区で自称モン、湘西方言区では自称コ・ションと類別されており[『苗族簡史』編写組 1985]、施洞鎮ミャオ族はダンプウと自称し、おそらくはムウのサブグループの一つである。『中国苗族服飾図誌』によれば、「ミャオ族全体の服飾は173種類あり、特に女性の服飾は130種もある」という [呉等 2000: 23]。彼らは、数多くの民族衣装の中で極めて華やかな衣装と銀装飾を持つことで、今まで注目を浴びてきた。毎年伝統行事「姉妹祭」と「龍舟祭」は、それぞれ女性と男性を中心として行われ、施洞鎮と周辺地域のミャオ族が集まり、民族衣装の盛装を身に付けて、踊ったり歌ったりする祭事である。台江県は政治的中心であるが、施洞鎮は古くからのミャオ族の文化的中心となってきたのである。

施洞鎮は、川沿いの港として、清の時代から木材の商売をし、貴州地域内では重要な輸送拠点になり、清水江流域の施洞鎮ミャオ族は財政的に豊かになり、銀両を沢山手に入れた歴史がある。しかしながらミャオは、移動を経験してきた民族であり、ゆえに慣習的に持っている銀両を装飾品にして、身に付けて行動すると従来考えられてきた。

本稿では、台江県施洞鎮に居住している自称ダンプウの集団を対象とする。

筆者は2014年4月、2015年4月と8月、2017年8月から9月の間、施洞鎮を訪問し、毎年の伝統行事「姉妹祭」、「龍舟祭」について調査を行い、施洞鎮ミャオ族の日常生活と祭りの様子を観察し、生活実態の把握に努めた。以下では、ミャオ族の民族衣装の過去と現在、さらに民族衣装製作の過程を記述し、分析を加える。なお、本稿の研究対象とした民族衣装とは、上着、前掛け、スカート（女性用）、ズボン（男性用）、靴及び全身に着ける銀装飾を指す。

ミャオ族の衣装文化の変容に関しては、21世紀に入って、中日両国において複数の先行研究が発表されている。日本側では、宮脇千絵〔宮脇 2010, 2017〕が、雲南省文山のミャオ族（自称モン）の民族衣装の既製服化を伴った苗族女性の重労働の減少傾向を論じ、佐藤若菜〔佐藤 2014〕が、貴州省ミャオ族の民族衣装をめぐる母から娘への伝承などを論じている。

中国側では曾祥恵〔曾 2011〕が「文化の生存環境」と「文化的シンボル」の角度から、ミャオ族民族衣装の分析を行っている。曾の研究は筆者のフィールドと重なるが、現代的変容を十分論じているわけではない。本稿では、これらの文献を適宜参照しながら議論を深める。

1. 伝統行事「姉妹祭」と「龍舟祭」における民族衣装

「姉妹祭」と「龍舟祭」は、施洞地域の最も重要な伝統行事で、施洞鎮ミャオ族の人々は両方とも盛装で参加するが、「龍舟祭」は男性中心のイベントで、男性の民族衣装は単一・簡素であるため、多様に変化する女性民族衣装が顕著な役割を果たす「姉妹祭」を中心として分析する。

（1）「姉妹祭」の歴史と変遷

「姉妹祭」とはミャオ語「Nongx Gad Liangl」（ノンガリヤン）を漢語に翻訳したもので、直訳すると、「色染めご飯を食べる」という意味になる。

「Nongx」は食べるの意、「Gad」はご飯の意、「Liangl」はご飯を染める植物を指すが、さらに「願いを叶える」の意味も含まれている。「姉妹祭」は婚姻という主題をめぐる、若年男女を中心とした社交活動である〔劉冰清主編 2014〕。ミャオ族は独自の文字を持たないため、「姉妹祭」の発祥時期を歴史

をさかのぼって明らかにすることはできない。ただ、『台江非物質文化遺産』の申告書の中では、「昔からミャオ族は姉妹飯を食べる習俗を持ち……このような古い風習は歴史発展の中で固有の手法として現在まで伝承され、特にこの「ミャオ族の奥地」としての台江県では途絶えたことはなかったであろう」[熊 2012: 18]とあり、長い歴史を持つ習俗であると推測できる。1990年代以降、政府部門は漢語の名称を「ミャオ族姉妹祭」と統一したが、ミャオ族内部では自称を維持し使っている。

1998年4月、台江県人民政府はミャオ族文化を広く宣伝するために、「貴州台江ミャオ族姉妹祭」のイベントを開催した。イベントとして名前を統一するために、各業界の意見を聴取し、「Nongx Gad Liangl」を正式に「姉妹祭」と命名した。2006年5月20日、中国国務院の承認で、「姉妹祭」は正式に第一回国家非物質文化遺産名録に登録された。以降、「姉妹祭」は一気に知名度を上げ、国内外の関心を呼び、台江県政府も、かつてないほど重要視するようになってきた。

伝統的な「姉妹祭」は、元来主に春期に時間をかけて行われる行事である。旧暦の正月から2月の間に行うのが一般的で、最も代表的な時間は旧暦2月15日から17日及び3月15日から17日であると言われている[曾等 2009]²。「姉妹祭」は、主に清水江中上流地域のミャオ族村で行われ、中でも施洞地域は最も規模が大きく、広く知られている。『中国節日誌・姉妹祭』は「姉妹祭」について、以下のように指摘している。

20世紀90年代末、台江県政府は地方の経済発展のために、民族文化観光開発の試みとして「ミャオ族姉妹祭」を提起した。開催時間の選択は、当地ミャオ族の民間習俗への尊重と外部から関心のある人々の利便性の両方を考慮に入れた結果、旧暦3月15日に定めた。十数年近くが経つ現在、施洞地域のミャオ族も次第にこの祝日時間を認めた。もともと別の日で過ごす近隣村もまた準備をして参加するようになった[劉主編 2014: 247]。

伝統的なミャオ族姉妹祭は、若年男女の交際を中心として行われてきた。

その過程の多くは、食べ物に関係する行動が多く伴う。最初は「抬粑粑」（もち運び）を媒介にして男女が知り合い、続いて「撈魚」（魚捌い）、「遊方」（ミャオ語では *hxak yex fangb* と呼ばれ、歌唱文化の一つ、男女が互いへの気持ちを歌で伝える）、「踩鼓」（太鼓を囲む踊り）、「討姉妹飯」（もち米の姉妹飯を貰う）、「討臘肉」（燻製肉を貰う）などの儀式を終えてはじめて互いを「送別」するという〔熊 2012〕。この中で、「姉妹飯」は特に重要な要素で、女性から男性へ渡す「姉妹飯」は交際の可否を示す情報を帯びているとされる。3月13日の朝、必ず黒、黄、白三色の「姉妹飯」を蒸して作る。黒い米と黄色い米は染めたものであり、黒いご飯はミャオ語で「*gadlai*」といい、「*ga*」はご飯の意、「*dlai*」は黒の意である。黄色いご飯は「*gafang*」といい、「*fang*」は黄色の意である。染色の色に関して、黒は木の葉を使い、こし、そしてそれを沸かした湯に米を一晩浸す。染色の葉っぱは「*dougadlai*」といい、「*dou*」は木の意である。つまりこの木の葉は「黒いご飯の木」の意で、染色のご飯から名付けられた。黄色いご飯は、別の木からとった花を煮込んで、同じく米を一晩浸して作る。出来上がった黒いご飯と白米と一緒に蒸して食べる〔肖 2016: 19〕。

だが、ミャオ族文化が注目を浴びるようになるのと並行して、「姉妹祭」の運営体制は変わりつつある。かつてのような「姉妹祭」の主催者である各村の「長老」、すなわち村で人望のある年長者（男性）が村の行事を主催する時代が終わり、現在は台江州政府が主催者となり、毎年旧暦3月15日を含む3日連続のイベントが行われている。観光化を推進する政府主催者は、姉妹祭の本来の目的や目標よりも、観光化による娯楽性及び文化宣伝の効果に着目し、「姉妹祭」自体が集客力を高めるイベントになることを望んでいる。観光化推進について、毎年、黔東南州政府は、署名入りで観光誘導策を提示している。筆者が2014年と2015年に「姉妹祭」に参加した時に、初日は台江県城に大きな舞台が設営され、ミャオ族出身の有名歌手などの歌と踊りのパフォーマンス、民族盛装の展示など、観客向けに見世物化したイベントが開いていた。政府は台江県周辺の人々を呼び寄せ、世代別、男女性別で約10人を一組とし、みな自ら盛装し、各鎮、村から県城までパレードするイベントに参加するよう呼び掛けている。参加者には支度金が給付される。筆者が

パレードに参加する人々にインタビューしたところ、このようなパレードには、一組ごとに政府から 100 元の支度金が給付されたとのことである。一人平均 10 元である。舞台パフォーマンスとミャオ族の人々のパレードは、ほぼ毎年初日の定番になっている。「姉妹祭」の中心が、人為的に施洞地域から台江県城に移ったのである。そして二日目と三日目になってはじめてミャオ族の人々は各自の村に戻り、「遊方」、「踩鼓」、「討姉妹飯」などを自発的に行えるのである。

ミャオ語では「姉妹飯を食べる」という意味の祭りが「姉妹祭」と命名され、政府が主催者となってから、「姉妹祭」は本来の一連の若者の間の活動から、外来者や関係者に見せる娯楽へと変化しつつある。従来の「姉妹祭」は若年男女を中心として社交活動として位置づけられ、ミャオ族内部でも若い男女が互いに「見せる」という前提を持っていたと同時に、「食べる」という内容も強調されたが、現在では外部の人々に「見せる」という意味の転換によって、「姉妹祭」への全体的関心が、盛装で一番目立つ女性の民族衣装と銀装飾に結果的に寄せられるようになったのである。

(2) 「龍舟祭」の流れ

「龍舟祭」は毎年旧暦の 5 月 25 日に開催される。男性中心の伝統行事で、施洞鎮を中心に、施洞鎮周辺の各村、寨から男性（老若を問わない）を集め、「独木の龍舟」という丸太で作られた大きな舟に約 48 名が乗り、一緒に施洞鎮の波止場まで漕ぐ。舟に乗る人が多ければ多いほど、村が繁栄すると喜ばれる。舟の前方に逆方向に座る年配の男性「龍頭」は毎年選ばれ、船員全体をリードする他、太鼓を叩く役目を持つ。なお、舟後方にはさらに年配の男性 1 名と女性の装飾をつけた男の子が座り、「鑼」を叩く役目は男の子が担う。船員メンバーが集まっても、急いで出発するわけではない。女性は舟に乗ってはいけないという禁忌があるため、多くの女性の家族や親戚は舟に近づいて、お土産として龍舟の首あたりに、ガチョウや鳥、鴨などの動物を架ける。龍舟祭が始まると、皆漕ぎ出すが、一位を争うのが目的ではない。村人一人ひとりの参加が重要視される。そのため、貴州省外に出稼ぎに行く施洞鎮ミャオ族労働者は、帰郷のために無理して仕事を休むことがあり、それ

に伴うトラブルも多く発生していると聞いた。「龍舟祭」の終了後、家族が集まってお土産としてのガチョウ、鳥などで料理を作るが、その行為は、「龍の肉」を分けて食べると形容される。

2. 「施洞型」民族衣装の過去と現在

施洞鎮ミャオ族に関して、佐藤若菜の定義 [佐藤 2014] に依拠し、その民族衣装を「施洞型」として議論を進める。筆者が実際調査を行った地点は施洞鎮に属する B①郷、B②村、T 村、J 村と F 村である。この B①郷は T 村の隣で、施洞鎮政府所在地から歩いて 10 分程度で、F 村と J 村は施洞鎮中心地域の一部である。なお G 村に居住しているのは主に漢族である。B②村は、施洞鎮中心部から車で約 15 分の路程である。

(1) 民族衣装の過去

ミャオ族は、独自の文字を持たなかったため、古代の様子は、他者である漢族の文献からさかのぼるしかない。かつての「施洞型」衣装の状況を伝える具体的な文献がなく、ミャオ族全体の衣装について記載のある文献を参考にする。『後漢書・南蛮伝』では「三苗、好五色衣服」とあり、清代の『黔苗図説』では、貴州のミャオ族について、服飾の色から紅苗、黒苗、花苗、青苗、白苗などと他者から名付けられた分類を利用し、紅苗は「衣服悉用斑糸」、黒苗は「衣尚黒、男女跣足」、花苗は「衣服以布輯条、織成青白相間、無領袖、洞其中」、青苗は「衣尚青、婦以青布籠髻」及び白苗は「男科頭跣足、婦盤髻長簪」という風に描写されている。施洞鎮ミャオ族はこの分類方法で「青苗」の範疇に入るが、このようなミャオ族の五色分類については、その基準が不明確で恣意的であるとの指摘もされている。ミャオ族衣装の歴史的状況に関して、許は、ミャオ族衣装の特徴を、①服飾の原料は多く地元産である、②多様な文様、③鮮やかな色彩、④刺繍、染め物、銀装飾などの多層的工芸、⑤形式は上着とスカートが多い、という 5 点にまとめている [許 2009]。現在のミャオ族の民族衣装を概観すると、文様、色彩と工芸の面では確実に豊かになっているが、形式上はほぼ上記の原初形態を維持しているように見える。だが、現代民族衣装の原材料などは、現代繊維の導入に大きな影響を受

けている。また、昔の民族盛装は男女ともスカートだったが、現在のミャオ族男性衣装は、清代以降、漢民族の影響を受け、古くからの男性衣装はすでに衰退した状態で、男性の民族盛装のスカート姿については、貴州省榕江県内の月亮山地域の極一部にしか認められない。

（２）民族衣装の現在

現在の「施洞型」民族衣装は、基本的に普段着と盛装の二種類に分類でき、普段着は生活用で、盛装は年齢層もしくは結婚による地位によって、未婚、既婚の二種類に分けられる。以下、タイプごとに説明をする。

まずは女性の普段着から説明する。2015年～2017年に筆者が調査に入った時点では、すでに民族衣装としての普段着は基本的に中年から老年の女性しか着用しない状況になっていた。貴州省は、経済発展の面で他と比べ後進地域で、改革開放後、農村部の大量の人口が経済発展地域や沿岸部に出稼ぎに出るようになった。現在の出稼ぎの状況について、筆者が調査を行った J 村、B①郷、F 村の中では、一般的傾向として労働者の出稼ぎ先は沿岸の広東省、江蘇省、浙江省、福建省、上海市などに集中している。都市の中心から離れた工場などに集団的に出稼ぎするのが特徴であり、働き口があれば同郷出身の人を紹介して工場に入れてもらうこともしばしばである。労働内容としては主に機械操作の刺繍、製造業、食品工業など半機械化の仕事である。工場勤務に専念するだけの生活で、月給のほとんどは貯蓄にまわる。中年婦人の多くは働き盛りの年齢で家を出ており、若年女性も子育てのために一時的に帰宅するのみである。村々の中年婦人はほとんど洋服を着用する傾向にあった。より若い女性になると民族衣装の普段着を着る人は全く見当たらない。彼女たちは、ファッションに敏感で、都会の女性と同じように、常に洋服を欲しがるとの志向が顕著である。若年ミャオ族女性の衣装は普段の洋服、祭時の民族盛装とはっきり二つの状況に分けられるであろう。では年配の女性はどうか。筆者がインタビューを行った施洞鎮 B①郷の 60 代婦人 S 氏によると、日常生活においては、洋服と民族衣装の普段着はどれを着用してもよいと考えているとのことである。民族衣装の普段着には既製服と手づくりの二種類があり、頭部には、施洞地域特有紋様の頭巾と銀簪を髪に飾り、

上着とズボンの両方は既製服を生産する店(施洞鎮の普段着の既製服専門店)で買う。手づくりの普段着は紺色の藍染から作られる。藍染布も年配の女性が独自に製作している。「手づくり」と染色については後述する(写真1を参照)。



写真1 年配女性の民族衣装普段着(既製服)

他方、女性の盛装に関しては、未婚女性の盛装は最も色鮮やかで、銀装飾も最も派手で複雑である。上から順に説明するならば、頭部装飾(銀装飾)、「亮布」(後述)の上に刺繍をつけて作られた上着、スカート、靴及び首飾り、前掛け、ブレスレットなどの銀装飾を身に着ける。銀装飾は家々の経済状況によるが、頭部装飾は銀製の冠ほか、額飾り、簪など大量につけるのが風習だと説明された。

「亮布」は「施洞型」民族衣装を表象する布の一つで、民族盛装はすべて「亮布」を土台に刺繍を施したり、スカートにプリーツをつけたりして完成する。「亮布」とは棉布を藍染した後、仕上げ段階で赤みのあるツヤを出したパリッとした布である。銀製の首飾りは三つも重ね、胸元から顎を隠すまでつけるとかなりの重さになる。その他、腰帯、前掛けにも銀装飾をつけるようになっていて。多くの場合、銀装飾だけで10キロぐらいの重さになる(写

真 2 を参照)。既婚女性の盛装も、頭巾、刺繍付きの上着、銀装飾、スカートといった形式は、未婚の女性のそれと変わらないが、銀装飾が大幅に減少する。刺繍の紋様が変わり、色合いも少し柔らかめになる（写真 3 を参照）。

以上のような盛装は、「姉妹祭」の時に最も盛大に身に着ける。この日に臨み、女性として最も「見られる」ことを意識し、また特に未婚女性にとって、恋愛相手を見つける機会にもなるので、確実に「姉妹祭」では最も華やかな衣装を身に着けるのである。大量の銀装飾は、家庭の経済状況の豊かさを示す証拠でもある。



写真 2 未婚女性の民族盛装



写真 3 既婚女性の民族盛装

男性の民族衣装にももちろん盛装はあるが、現在は単一・簡素になり、「着用」の機会自身は自身の婚礼の場面など、極めて少ない [佐藤 2014]。筆者が観察した範囲内で、男性は日常生活において完全に洋服を着用するようになっていく。男性の民族衣装は、歴史的には清の時代に政治的に漢族文化の影響を大きく受けたため、現在は基本的に清の伝統様式を踏襲している。男性の盛装では「亮布」で作った上着以外、銀の腰帯も場面に応じてつける。夏期は時に帽子をかぶる場合がある。「姉妹祭」に参加する若年男性には、盛装の傾

向が一部に認められた。実際に、男性が盛装を最も着こなす場面は「龍舟祭」である。だが、男性の盛装は、女性が「見られる・見せる」を意識して着こなしているのに対し、男性は形式的に着ているだけで、家族内で期待される役割を表象で果たしているようにしか見えない。男性民族衣装の着用の現状について、筆者は施洞鎮中心に位置する F 村で、民族衣装の店を経営する 50 代男性 L1 氏にインタビューを行った。L1 氏は F 村出身で、90 年代改革開放後、上海市への出稼ぎ労働者として裁縫技術を学習後、浙江省温州市で裁縫関係の出稼ぎ労働者として 4 年、北京市潘家園骨董市場でミャオ族民族工芸品販売者として 10 年余りにわたり、故郷以外の地域で生活した経験を有する。L1 氏は 2015 年から F 村に戻り、民族衣装専門の店舗を開き、それと同時に隣の家屋で小さな飲食店を経営し、二つの店を主な収入源にしている。L1 氏によると、彼の民族衣装専門店は主に男性民族衣装の注文を受けながら、女性の民族衣装の注文もまれに受けるという現状である。なぜなら、男性の衣装の作製は上着だけ伝統の「亮布」を使ってミシンで縫い上げる比較的簡単な仕事であり、すでに洋装の黒いズボンで代替されているボトムスを作る必要がないからである。他方、女性の民族衣装は、刺繍と裁量が細かく、手作りでしか完成できない部分がある。ゆえに店で受ける注文は主に男性衣装になり、一年中注文の最も多いのは龍舟祭と漢族の旧暦新年の二つの時期であると L1 氏は語る。旧暦新年は国レベルの休日であるため、出稼ぎに出たミャオ族も休暇をもらい、故郷に戻る。若者はこの時間を利用して結婚式を挙げる傾向にある。披露宴に参加する人も新郎自身も、民族衣装で参加することが求められ、多くのミャオ族の人々が年越しの準備で店を往来する。

以上のように、ミャオ族男性は、「龍舟祭」などの年中行事や人生儀礼の一部を除き、ほとんど洋装を着る傾向が強い。ただし、その民族衣装も上着だけの「伝統」表象である。それと対照的に、ミャオ族女性の民族衣装の普段着着用は、年齢層によって傾向が分かれる。祭事の折には、年齢層を問わず民族盛装を着用し、外来者には統一的な衣装と映る。従って、ミャオ族女性全体が民族衣装を着る祭事において、人々は一時的に過去に回帰していることになるのである。

(3) 民族衣装着用の変化

文化的な構図から考えると、女性の上記のような衣装文化は、外部の人々に見せる意識が生まれる以前、まずは自分の生活する区域内でのまなざしを意識していたことが考えられる。実際、インタビューによれば、施洞地域女性衣装文化は、自らの美意識よりも、コミュニティ内部での視線を気にする傾向が顕著である。

掲載した写真からもわかるように、女性たちの民族衣装は、老若関係なく形式上は基本的に同じである。施洞鎮 J 村に居住する 50 代婦人 L2 氏へのインタビューによると、衣装の個人差はあくまで刺繍の紋様の変化、より手の込んだ刺繍の枚数を増やすなど、ささやかな変化がある程度である。銀装飾に関しては、経済的に余裕のある家庭では、首に飾るネックレスを一つや二つ増やす他、冠の大きさを変えたり、指輪とブレスレットの数を増やしたりする程度であり、祭事の際の個性はさほど強調されないのである。では施洞鎮ミャオ族の女性たちは、民族衣装を着用して何を誇示したがるのか、率直に質問を L2 氏に投げかけると、彼女は以下のように答えを述べている。

いや、誇示するしない以前にまずはちゃんと故郷に帰って衣装を着て祭りに参加することだよ！（近年出稼ぎ労働者が勤務先で休みを取れない状況が多く、祭事の際は帰れない若者は大勢いる）帰ってこないなら大事な祭りにも参加しないって周りに言われるさ。衣装を着たら家族と一緒に過ごしたいから、娘がパレードに出るとお母さんも隣についていく。銀は柔らかいから落ちやすく、（値段が）高いから拾わなきゃ！衣装は人と違うものがあればきれいだというんじゃないくて、人並みの衣装を用意してあげたかどうかの方が大事なんだ。もっとお金があれば沢山の銀を買ってあげたら家がお金持ちで、人前で誇れるわ。私たち母親は大変だよ！娘にちゃんとした衣装を用意しないといけないから、いつも暇があると刺繍をして衣装を作っているよ。銀は高いし、お金はほとんどそれに使っている。（銀装飾は当地で銀と呼ばれている）

（ ）内は、筆者の注記（以下同様）

つまり L2 氏の意味するところでは、「姉妹祭」と「龍舟祭」などの祭りに、施洞鎮ミャオ族女性が衣装を着用するのは、自分自身の美意識よりも、「周りの目」への意識が強いようである。参加するのは周りのみんなが参加するから、そして人並みのものを母親が娘に用意するのが義務とみなされているからである。では用意しないとどうなるかと尋ねると、「家の親戚（叔母、姑などの女性）、隣人に後ろ指を指され、この母親は怠け者で、自分の娘の衣装の用意すらできないと厳しく言われるから、どうしても衣装を用意してあげるんだ」と彼女は応じた。「義務感」、「他人からのまなざし」が、ある意味で民族衣装の文脈に関するキーワードになっているのである。

文化的シンボルとしての服飾文化研究を試みる曾祥恵は、以下のように分析する。

黔東南ミャオ族地域のコミュニティでは、一つのサブグループもしくはその下位集団を定義付けるには衣装の全体的様相が判断の第一基準となり、特異な文化符号として、同一文化の指導の下にいる人々に同じ種類の親密感と強烈な相互認知関係を生み出し、自然に親和力と凝縮力を持たせることになる……台江県施洞地域では、(女性が) 母親から祖母になるまで、衣装は複雑なものから簡素なものへと変化する[曾 2011: 39]。

他方、施洞鎮ミャオ族がお互いの集団の位置づけを衣装で認識するのは、ある意味で、民族衣装を用いて「内」と「外」の境界を描いているものとも考えられる。同じ服を着るなら社会的なカテゴリーとして内側の人間で、知らない人でも親近感を持ち、違う服なら外側の人間で、ある程度の距離を置くことになる。だが現在では、民族衣装が日常生活から次第に存在感を消しつつあり、常に洋服の普段着で生活するようになると、服装では必ずしも仲間がよそ者かを類別できなくなる。民族衣装の意味と文脈が変わりつつあるのである。以下、民族衣装製作の現場に残る「手づくり」過程の詳述から議論を深める。

3. 民族衣装製作——布づくりと刺繍

民族衣装の製作は、すべて女性の仕事だと社会的にみなされてきた。ではジェンダー的に布との関係はどうなるのか。民族衣装製作に関する二つの重要な局面——布づくりと刺繍について調査結果から検討を加え、併せて一部材料の入手先であり販売先でもある定期市について調査の結果を提示する。

(1) 民族衣装の布づくり

筆者は2017年8月～9月の間、施洞鎮B①郷で布づくりについて60代の婦人S氏にインタビューし、ミャオ族伝統「亮布」の製作を見学した。S氏によると、昔は女性が10代になると、家々で布づくりと刺繍を勉強していたが、現在では彼女たちの世代より下の世代は生活に迫られ、出稼ぎ労働者が多く、留守をしており、布づくりどころではないという。孫もいる三世代の世帯では、親についていく子供は布づくりを学ぶ環境になく、家に残る留守児童³は勉学に専念するように躰られ、一緒に生活している祖父母にも教えようという意識はないようである。若者世代は、次第に自文化の布に対する興味が希薄化し、従って、布づくりは年配女性のみの仕事と化しているのである。

布づくりは体力も時間もかかる作業のため、通常は毎年8月、農閑期しか製作する時間がないという。染物の白い木綿の布は市場から購入する。具体的な製作過程を、S氏の説明を参考に5段階で詳述する。

- ① 基礎段階ではあらかじめ藍染の原料を用意する。染原料藍の半製品で、藍と酸化カルシウムの混合剤であり、青いペースト状である。週二回ぐらいの定期市で、藍染料の専門販売者から購入できる。次に大きな水がめに移し、染料を水に混ぜ、約1.5キロの純米酒を入れて発酵させる。水がめには染め物の精霊が宿り、お酒を捧げることで精霊が元気をもらい、初めてきれいな青色の布に染めて下さるのだと信じられている(写真5を参照)。
- ② 自家用鍋に「黄飯花」⁴を大量の水で煮込み、水の色が濃い黄色になると、布を少しずつ伸ばしながら長い棒で鍋に重ならないように入れる。

布を煮込む時間は 10 分前後が目安で、布全体が黄色くなったら染料を入れてある水がめに全部浸す。この過程は三日間ほどかかる。写真 4 に示したように、水がめの上に簡易な棚があり、染めた布を半日ぐらい浸して取り出し、棚の上にたたみ、一晚放置する。以上の作業を三日連続で繰り返す。三日後、布はしっかりした青黒い色に染め上がる。染め上がりの布は水道水もしくは川沿いで余分の染料を洗い落とす。

- ③ 布の硬さを調整するには、定期市で水牛の皮を購入し、それを全部水に溶けるまで煮込む。その溶け込みの汁を布の上に均一に塗り、一回乾くまで干す。卵白を使う場合もある。乾いた布を木槌で打つことによって、平らにし、光沢を出す。その過程を何回か繰り返すとツヤと赤みが次第に出る。
- ④ 熟成させる手段として、写真 4 のように布を巻いて、使わない服などで包み、桶の中に入れて蒸す。時間の目安は約二時間。桶から出した布はきれいな赤みを帯びており、これを庭に日の下で干す。この段階から、布から酒の香り高い匂いが拡散する。
- ⑤ 最後の作業は、布表面を打ってツヤを出すことである。これには一番時間がかかる。打ち終わったら「亮布」の出来上がりである。もともと施洞鎮ミャオ族女性は木槌で乾いた布を打っていたが、とても体力がいるため、女性には重労働で疲れる。現在、施洞地域には機械を扱う店が布を打つ対応機械を販売し、経済的に余裕のある家庭は大体一台持っているという（写真 6、7 を参照）。

S 氏は自家用機械を二台も持ち、隣人や知り合いなどは相応の金額を出し、彼女の機械を共用する。機械は約 30 キロのハンマーが台面に落ちることによって布を強く打ち、布を移動させながら平らにすると、次第にツヤも出てくる。S 氏が村内で最初に機械を導入すると、すぐに村中に普及し始めた。8 月中、村には布を打つ音が早朝の 6 時頃から夜 9 時までずっとやまなかった。機械は一台 4,000 元もかかるが、重労働から解放されて、以前よりずっと楽であると S 氏は述べている。

S 氏は自分の姉に布づくりを手伝ってもらい、6 反の「亮布」を作る予定



写真4 「亮布」蒸し



写真5 「藍染」染料



写真6 「亮布」仕上げ



写真7 「亮布」のツヤ

であると教えてくれた。それらを全部家族内で衣装づくりに活用するのかと聞いたら「一部は家族のために仕立てるが、残りは定期市で売る予定だ」と

答えた。定期市は筆者が調査している間、二回開催されたことがあり、筆者が尋ねたところ、当地では「亮布」の値段は1メートル約60円で、1反は300~400円で売れるとのことである。「亮布」消費の主体は誰なのかと聞くと、主に施洞地域のミャオ族女性で、出稼ぎ労働者として沿岸部で働き、布を作る余裕はないが、経済的な余裕があり、布を買って自分用の民族衣装を作る彼女たちが主な消費者であるが、その他にも「亮布」を購入し、凱里市（黔东南州の首府）で売る中間商人もいるという。その中間商人の販売先を聞くと、多くはミャオ族内部に対してであり、極一部は興味のある観光客によって購入されるが、観光客の多くは、布ではなく刺繍を施して完成した衣装自体を買うのを好むと説明した。

布は、民族衣装の構成要素であるが、まだ観光化の途上にある施洞地域では外部からの注目が少なく、ミャオ族内部での機能——すなわち材料としての布の役割を有する。

藤田真理子は「布の生産と「伝統」の創出」において、奈良晒の保存・伝承活動について考察している。奈良晒は、ほぼ衰退していた状態から、県の無形文化財指定後、「伝統を守ろう」という声のもとで保存活動が始まり、多くの注目と関心を集めた。しかし、「奈良晒は本来衣生活を支える実用品で、復活したときには「文化財」……非日常的な……宝として扱われた……さらに、活動の中心的担い手になっているのは、かつて奈良晒の生産に従事した人々ではない……農村部に限ってみても、ここに想定されているような共同体を中心とした農耕社会とは異なるものである。」と指摘している〔藤田1995〕。「伝統」の創出の文脈で、生産の担い手は必ずしもかつての共同体の枠組みを基盤にしているとは限らないのである。では外的要因が次第に強くなりつつあると考えられる施洞地域ではどうだろうか。

施洞地域の「亮布」は実生活の一部となっはいるが、現在すでに日常必需品とはいえなくなっている。ミャオ族女性自身は年配の女性のみが布づくりに従事するため、下の世代の出稼ぎ労働者の行動パターンは、伝統的な布づくりと断絶した世代間構造になっている。普段は沿岸部で働き、毎年の「姉妹祭」には故郷に戻り、楽しく過ごすか、衣装は母親が用意するか、買うかの二者択一となった。家で留守番をする年配女性は、製作に励み、余った分

を売りに出し、布市場の需給バランス維持に貢献している。収入源を出稼ぎに依存する中で「手づくり」製作のこのような構図は、市場経済の浸透と政府主導で観光開発が進行する現在、施洞鎮ミャオ族社会の内的要因というよりは、外的要因から絶えず新たな変動にさらされているのである。

(2) 刺繍

刺繍について詳しくインタビューできたのは、施洞鎮B②村に帰省中の40代の婦人J氏だった。J氏はB②村出身、現在既婚で二人の娘がいる。浙江省杭州市で出稼ぎ労働者として働いている。休暇をもらった帰省中も、時間を惜しんで娘のために刺繍を施しているところを、筆者が訪ねた。刺繍は、基本的に母親が娘のために作ると語る。自分のために作る場合もあるが、娘のためが最も多いという。彼女の母親も、施洞鎮ミャオ族女性として少女時代の10代位から母親が刺繍を施し、娘の民族衣装を作る伝統を保ってきた。J氏によると、子供の背がどんどん伸びるため、成人までに十数着をずっと作り続ける必要があるそうだ。従って、母親は出稼ぎ先にも刺繍の工具と材料などを持ち歩き、手が空く時さえあればすぐ刺繍作業に専念する。刺繍は毎年の祭事の際に着る衣装にも使用するため、それに間に合うように作業を急ぐ。J氏は、作る際には手がかかるし、出稼ぎで稼いだお金もその多くは娘のために使っていると語る。刺繍をするのは仕事の合間で休憩もできず、目と手が大変疲れるという。加えて自分でする刺繍だけでは衣装全体を完成する能力が足りず、一部材料は定期市などで購入して不足場合もあるという。銀装飾品はほぼ購入の形になり、貴金属なのでなかなかの高額である。全体としてとても体力と時間の要る作業で、お金もかかり、大変だと不平をもらす。ではなぜそうしなければならないのかと尋ねると、「娘にきちんとしたものを着用させないと、周りの人々（隣人や親戚）に笑われ責められる」と返答した。もし自分たちが「怠け者」と責められたら大変なことになるという。つまり刺繍や銀装飾を娘に用意することは、他人からのまなざしにおける自らの羞恥心と関わっているのである。

施洞地域のミャオ族女性は結婚後、従来のやり方として、女性は幼いころから実家に保管している民族衣装と銀装飾を母親から受け継ぎ、婚家へ持つ

て保管する習慣があった。女性の民族盛装は、女性が実家からもらえる最大の富であり、親が時間をかけて少しずつ作り上げたものである。しかし、近代化によって衣装の保管方法も変化を遂げてきた。佐藤若菜は、施洞地域のミャオ族における実家・婚家間の移動とその変容を「衣装がつなぐ母娘の「共感的」関係」と形容し、ミャオ族女性は、結婚に伴う衣装の移動が遅れた場合、「坐家」という未婚でも既婚でもないあいまいな状態を過ぎてから、衣装を婚家で保管するか否かを判断すると指摘した[佐藤 2014]。J氏自身はミャオ族同士で結婚していたし、彼女も上述と同じように「坐家」を経験してから衣装を婚家へ移動したことが分かった。彼女は娘に衣装を用意し続けるのは、この衣装の移動を見込んだ行動なのかを理解するために、将来娘が結婚したら衣装を用意して婚家に保管させるのかと尋ねると、彼女は、以下のよう

に答えた。

私たちミャオ族はね、(子女には)とても公平なんだ。女の子が生まれたら衣装を用意してあげるし、結婚したら嫁入り道具として渡す。男の子が生まれたら、お金を貯めて家を建ててあげる。だから娘には念を入れて立派な衣装を作ってあげなきゃ。お嬢さんのところに持っていったらそれが一生の宝物になる。伝統的な考えからだど、娘にはミャオ族同士で結婚するという筋書きがあるけど、もしこれからね、漢族の人と出会えたら、結婚させたいと思う。もう娘に私たちの大変さを二度と経験させたくないから。

J氏は娘が漢族と結婚することで、ミャオ族の伝統を必ずしも娘が受け継がなくてよいと考えている。金銭的に節約になるし、大量の時間と体力を他のことに集中できる。このような考え方の変化は、改革開放後、港灣施設の整備を背景に、漢族が多数を占める経済発展を遂げた地域への労働者供給源として、後背の農村地域社会が機能するようになったことに一つの要因があり、J氏もその一人として貨幣経済優位の考え方の浸透に感化されているとも考えられる。従って、昔の習俗を続けることは、大きな負担にならざるを得ない。このようなある意味で現実的な生き方は、家庭内における「伝統」

の位置付けを希薄化し、世帯間の連携や「伝統」の共有も、以前より世帯ごとで多様化し、娘に用意する衣装も、もし手づくりの時間がなければ、買うか、あるいは買う余裕もないかの状況となっている。

民族衣装をめぐる諸相は、単なる衣装文化の動態に留まらず、外的要因を背景に、製作・継承に関わる母娘の関係性に影響を与えつつあることは確かである。その関係性の動態に関しては、これからも観察し続ける必要がある。



写真8 刺繍をしているJ氏

(3) 定期市と銀装飾

筆者は、現地での調査中に、2017年8月30日施洞鎮の定期市を訪ねる機会があった。定期市は、現地で「赶場」と呼ばれる。定期市の規律としては、「空五赶六」——五日間を空けて六日目が「赶場」開始である。一ヶ月四、五回程度で開かれ、時間は朝の5時ごろから昼の13時ごろまでである。

早朝から施洞鎮に開かれる定期市は、主に三通りの設置場所があり、施洞大道、施洞老街、施洞波止場がそれぞれ大勢の人々を集めている。施洞大道は、主に日用品、食料品を販売しているが、波止場の方は、日用品などはも

もちろん、既製の衣料品、家畜、軽食販売や朝食販売など沢山の屋台が出店している。一方、施洞老街は、単一的に民族衣装関係のものを出店する場所となっている。民族衣装関係のものとは、大きく刺繍用の糸、針、手縫いの刺繍作品、染色用の白綿布、牛の革、藍染用の材料「藍靛」、布を叩くための木槌、刺繍用ロウ、刺繍用型版、民族衣装の既製服（普段着）、赤ちゃんのおんぶ用の布などの分類に基づいて、いろいろな品物を販売している。

施洞老街には、一部銀装飾の専門店もある。銀装飾販売者に聞いたところ



写真9 刺繍関係の売り場



写真10 刺繍のパーツ売り（この一对で6,000元）

では、銀装飾の職人たちは、基本的に施洞鎮と相隣する塘龍村——施洞地域の銀匠村と呼ばれる村の出身である。銀装飾の販売は、主に定期市で行われ、塘龍村内で実際に店を持つ例は少ない。銀職人の手芸は、基本的に代々「伝男不伝女」（男子のみに伝承させる）の伝統を持ち、主に家族単位で技術が受け継がれ、街頭の店で三代目四代目という伝承はよくある話で、その中でミャオ族も漢族も同じ仕事に従事している。銀細工の作品は、重さによるものと個別定価の二通りの価格計算方法を使用している（筆者が聞いた 2017 年 8 月の時点は 1 グラム 7 元（約 110 円））。銀の原料は、主に湖南省や福建省から輸入している。銀は貴金属であるため、定期市で販売する銀装飾はプレスレット一つでも 2,000 元（約 3 万 5 千円）の値段が付けられている。観光客が尋ねても「とても買えないぐらい高い」と笑う。

銀装飾は、ミャオ族の衣装文化において必要不可欠なほど深く関わりあってきた一方で、現在、ある意味では値段の面で敬遠され、また重宝される傾向も一部認められ、ミャオ族女性にとって、矛盾した複雑な感情を抱かせる民族衣装の一部となっているのである。



写真 11 施洞鎮の定期市の一部

結びにかえて

本稿では、先ず施洞鎮ミャオ族の歴史及び伝統行事「姉妹祭」、「龍舟祭」の変遷を記述し、民族衣装をめぐる表象の文脈を確認した。その過程で、ミャオ族の民族衣装（主に女性）の過去と現在を探り、製作過程の現状とその担い手の語りを記述しながら、その現代の変容について議論を展開してきた。

本稿で明らかにしてきた施洞鎮ミャオ族の民族衣装の現代の変容は、次の三点にまとめることができよう。

第一点は、政府主導の観光化の文脈における民族衣装の位置付けの変容である。2006年、「姉妹祭」は第一回国家非物質文化遺産名録の中に登録され、並行して台江県政府が宣伝活動を拡充し、正式に「ミャオ族姉妹祭」と命名されて、施洞鎮ミャオ族はかつてない注目を集めつつある。その一方で、その観光化の動向は、民族衣装の本来の儀礼的、装飾的な機能に次第に変化をもたらしている。かつてはコミュニティ内で「見る・見られる」ものであった民族衣装が、コミュニティ外部の視線を意識したものに役割が拡大し、宣伝活動や祭事への積極的な参加姿勢から、女性民族衣装の仕様を精巧化し、銀装飾を豪華にするような行動に至るまで、当事者自身の意識も、外部の人々に「見られる・見せる」という意識がより強くなっていると考えられる。その流れで一部の「伝統」的とも言える民族衣装が復活し、ある程度の様式変化が認められるのである。

第二点は、民族衣装の製作と継承の背景となる母娘の関係性の変容である。ミャオ族社会では、現在でも、母親が娘に民族衣装を用意することが規範あるいは義務と考えられており、周りの目を気にし、「他人からのまなざし」を痛感しつつ「用意しないといけない」という意識が強い。第一点で指摘したコミュニティ外部に対するものと、第二点のコミュニティ内部に対するもののそれぞれに関わる二つの意識が、ミャオ族自身の民族衣装への関心と対応に強く影響を与え、彼女たちの民族衣装をめぐる行動様式は、衰退傾向にはなく、普段着として洋服を着る日常生活と明確に差異化しながら、文脈を限定して隆盛する状況も現れている。

第三点は、既製服ではない「手づくり」の民族衣装製作の現場における変容である。ミャオ族の民族盛装は、現在も手づくりにこだわるが、今の時代、

主な収入源となる生業として、出稼ぎで沿岸部に出掛けるのが大半であり、実際問題として、多数のミャオ族女性には、全工程を手づくりにする余裕がなくなっている。以前からその傾向はあったが、定期市で一部材料を入手することが、当たり前になってきたのである。他方、定期市は、手づくり製品の販路でもある。手づくりのものは市場に入ると、商品として扱われ、価格の高騰が想定される。このような変化の諸相を背景に、出稼ぎ労働者である一般家庭にとって、手づくりは大きな労働負担となり、「できるだけ自分で作り、経済的余裕ができたなら買う」という半市場化の状況が続いているのである。第一点で指摘した政府主導の観光化政策の進展においては、宣伝と政府財政による支出が優越し、これらは主に会議、舞台設営などに使われており、当事者であるミャオ族の人々へは、いまだ十分に利益還元がなされていないのが現状である。出稼ぎ行動に象徴されるように、経済的に必ずしも安定しているとはいえないミャオ族女性は、時間的にも、経済的かつ体力的にも大きな試練や悩みを抱えており、出稼ぎを通じて経済的に豊かになりたいという願望と、「娘に衣装を用意しなければならない」という強迫観念の間で揺れ動いているのである。

総じて、上記のような民族衣装をめぐる複合的な現代の変容の諸相は、筆者の観察とインタビューによる限り、2000年前後から現在に至るまで続いている。従って、そのような状況が継続する社会的背景が構造化していると考えられるのである。

2016年9月28日、毎年開催される「貴州省旅行（観光）発展大会」の2018年会場は、施洞鎮が属する黔东南自治州に確定した。施洞鎮は、貴州省観光発展の一環として、会場の設置場所として選出されたのである。

筆者が調査で入った施洞鎮は、大規模な建設工事が進む真ただ中にあり、刺繍と銀細工を目玉とした、「刺繍・銀装飾研習中心」、「銀装飾・刺繍産業基地」などを建設する計画が提案されている。政府としては、目玉となる刺繍と銀装飾の産業化を期待し、ミャオ族の一人ひとりもそこに参加し、将来的に、実際の利益も個人レベルに届くという発想からそのような構想を公的に貼り出してある「貧困扶助政策」からも示している。

現在、省政府レベルの国家戦略の下、観光開発が大きく進もうとしている施洞地域は、まさに変動期を迎えようとしている。観光資源化が急速に進む中、ミャオ族の人々は実際に利益を得ることができるのか、それともただ資源化の波に翻弄されていくのか、今後、コミュニティ内部と外部との関係は民族衣装の担い手の意識の変容にどのように影響するのかなどについての検討は、今後の課題としたい。

注

¹新華網貴州地方頻道群台江県站(<http://www.gz.xinhuanet.com/zfpd/qdnz/tj/zjtj.htm>, 2017年12月2日閲覧)。

²曾祥恵、劉氷清、熊克武による施洞鎮良田村での調査結果から。

³留守児童(the "left-behind" children)とは、父母双方もしくは片方が都会や沿岸部で働き、農村に残された子供たちのことを指す。

⁴前文で述べた黄色いご飯「gafang」を染める植物と同じ。

参考文献

日本語文献

佐藤若菜 2014 「衣装がつなぐ母娘の「共感的」関係—中国貴州省のミャオ族における実家・婚家間の移動とその変容」『文化人類学』第79巻3号：305-327

曾和英子・曾和具之 2014 「中国雲貴高原稲作諸民族における染めの地域特性—ミャオ族・トン族・プイ族・チワン族・ヤオ族の集落における実地調査に基づいて」『デザイン学研究』第60巻第4号：51-60

藤田真理子 1995 「布の生産と「伝統」の創出—奈良晒保存・伝承活動をめぐるジェンダー・世代・力—」『地域文化研究』第21巻：139-169.

宮脇千絵 2010 「民族衣装の既製服化—中国雲南省のミャオ族衣装の変化の

- 様相—』『総研大文化科学研究』第6号：41-64
—— 2017『装いの民族誌-中国雲南省モン「民族衣装」をめぐる
実践』風響社

中国語文献

- 『苗族簡史』編写組 1985『苗族簡史』民族出版社
劉冰清主編 2014『中国節日誌・姉妹祭』編写組、光明日報
肖凌翬 2016『「黒齒」と「赤齒」の比較研究』貴州大学修士論文
熊克武編著 2012『台江非物質文化遺産』瀋陽出版社
許桂香 2009「貴州苗族服飾文化歴史景觀探析」『貴州民族学院学報』
(哲学社会科学版) 総第113期：36-40
曾祥恵 2011「与「文化生境」競合的「文化符号」—黔东南苗族服飾文化探
析」『貴州民族研究』総第142期：37-41
曾祥恵、劉冰清、熊克武 2009 施洞鎮良田村でのフィールド調査報告書
吳仕忠等編著 2000『中国苗族服飾図誌』貴州人民出版社

史料

- 南朝宋 『後漢書・南蛮伝』范曄
清 『黔苗図説』作者不詳